

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ興亡：文明の盛衰は何を語るか？

| | |
|-------|---------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/5663 |

第四章 爛熟の時代——古典期

曆をもつ石碑の出現

マヤの古典期は、普通、イニシャル・シリーズと呼ばれる曆をもつ石碑の出現から始まるとみなされてきた。これまで見つかっているものとも古い日付をもつ石碑は、西曆で二九二年の日を刻むティカルの石碑二九号である。それゆえ、そのときから古典期が始まるといえるわけである。しかし、その石碑に刻まれている文字は、わずか五文字しか残っていないが、すでに発達した形態を示していた。このような文字は、かなり以前から文字を使用していなければ記せない。すでにみたように、紀元前後から、マヤ文字の先駆となるものは、マヤ地域の周辺にあり、また出所不明でありながら、マヤ文字の原形とみなせるものもたくさんあった。特に、グアテマラ太平洋岸のアバフ・タカリックで、最近見つかった記念碑一一号などをみると、ペテンのものだといっても通用するほど、初期のマヤ文字に似ており、そうしたマヤ周辺地域からの刺激のもとに、マヤ文字は生み出されたと考えられる。マヤの中心とみなされているティカルでさえ、西曆前にはすでに石彫りの伝統が始まっており、キミ期（一五〇年～二五〇年）には、石碑の破片と思われる石彫りがある。さらに紀元前後の墓の壁画には、絵の一部として、文字らしきものが描かれている。なかには、以後文字として使われるものもみられる。そうし

たことを踏まえると、少なくとも二五〇年頃には、古典期が始まっていたとみなすことに問題はない。古典期の始まりをさらに紀元前後から一〇〇年位までにさかのぼらせると、メキシコ高原やオアハカ盆地の編年の古典期にあたる時代と一致してきて、メソアメリカ全体ではすつきりする、と思うのであるが、そこまではまだ検討されていない。

マヤ文字はペテンの中央部で見つかったのであるが、以後一五〇年あまりの間は、ティカルやワシヤクトゥンを中心とするごく限られた範囲内ではしか使われなかった。しかし五世紀の半ばすぎには、南東部のキリグアやコパン、ウスマシタ川流域のピエドラス・ネグラスやヤシユチラン、北はオシユキンツクと、ほぼマヤ地域をおおう範囲に文字は広がった。そして古典期前期の終わる六〇〇年頃までには、五〇カ所あまりの場所で文字が用いられるようになる。古典期前期は、ツアコル期ともいう。これは最初に土器の編年が確立したワシヤクトゥンの時代区分に従った呼び名である。

この時代の特徴となる土器は、ペテン光沢土器 (*Gloss*) といわれるもので、表面が輝いている。そのなかでオレンジ色土器はアキラ・グループと呼ばれ、黒色土器はバランサ・グループと呼ばれている。多色土器の代表はドス・アロヨスで、幾何的な紋様が特徴である。人物や動物も描かれるが、硬い感じで、デフォルメされている場合が多い。器底にはリング状になった高台があり、器壁には罫が出ている。

この時代は伝統的には三つに分けられる。ツアコルⅠ期 (二五〇年～三五〇年) は、器壁が

型の器、首の長い壺、赤かオレンジの単色土器が特徴である。ツアコルⅡ期（三五〇年～四五〇年）は赤、黒、灰色がオレンジの器壁のうえに施された多色土器が特徴となる。クリーム色も重要になる。三脚または四脚の脚がつき、鏝付きの土器が主流である。ツアコルⅢ期（四五〇年～五五〇年）は、オレンジまたはクリームの下地に、赤、黒、灰色が施された土器が主となるが、装飾は、型押しや面取り技法や、漆喰を塗ったものが現われる。薄手のオレンジ土器も出現する。

ワシヤクトウンでは三区分されているが、実際には、土器の変化は緩く、三期を区分するのは難しい。また区分は遺跡により異なる。しかしはっきり区別できるのは、Ⅱ期とⅢ期であり、それはメキシコ高原の大都市テオティワカンの影響を示す筒形三脚土器が現われることで区分できる。

ティカルでこの時代に当たるのは、マニック期と名づけられている。その開始はワシヤクトウン（二七八年～マヤ暦で八・一二・〇・〇・〇）より少し早く、二五〇年頃とされている（Ⅰ期二五〇年～三〇〇年）。テオティワカンの影響が現われるⅢ期は、さらに二分され、マニックⅢa（三九〇年～四九〇年）とマニックⅢb（四九〇年～五五〇年）とされている。しかしながら、最近テオティワカンのものと非常によく似た、球戯の標柱と呼ばれる記念碑の発見により、テオティワカンの影響は、もう少し早くから現われることがわかった。そこでここではマニックⅢの始まりを二七〇年とすることにし、Ⅲaの終わりは、「嵐の空」王が死んだ少し後の四六〇

年としておきたい。それ以後テオティワカンの影響は急速に弱まるのである。

テオティワカンの影響は、二世紀の中頃には、すでにベリーズ北部のアルトゥン・ハでみられるという。その年代設定に疑問を抱く人がいるけれど、その頃またはもう少し後には、もうメキシコ高原との交流はあつたようである。そして三七八年には、ティカルの北のワシヤクトゥンで、メキシコの武器と考えられるアトラトル（やり投げ器）をもつたマヤ的でない人物を描いた碑が建てられている。しかしテオティワカンの影響は、特にティカルで著しい。ティカルでは、さきに触れた記念碑の最初の日付は三七八年である。「煙の上向きカエル」王とあだ名されている王が建立したものである。それからテオティワカンと密接に関係をもつた「巻き鼻」とあだ名された王が即位し、そして四二六年頃には、「嵐の空」王がティカルの支配者として即位する。彼はマヤとメキシコの融合を試みた王で、前期でもっとも傑出した王と考えられている。しかし彼の墓は、「巻き鼻」王の墓と異なり、メキシコからの輸人物はほとんどなく、伝統的なものに戻っており、その「嵐の空」王が死んだ四五五年頃には、メキシコの影響は弱まったと考えられる。マヤ文字を碑に刻む習慣が広まるのは、ちょうどその時期であり、マヤ文字の拡大は、ティカルにおけるメキシコの影響の弱まりとなんらかの関係があるに違いない。

ティカルはその後衰退に向かう。それはメキシコからの影響の弱まりに符合している。だが最近、カラコルの発掘から、カラコルがティカルを征服したのではないかと思われる記録を残

した祭壇が発見された。古典期後期に入った七世紀末までのティカルの衰退は、それが原因の可能性が出てきたのである。古典期後期になってティカルはふたたび栄え始めるが、ときを同じくして、今度はカラコルが衰退するのである。

カラコルは、ベリーズの西部にあるマヤ山脈一帯の中心地である。マヤ山脈は、生活に必需のメタテ（平うす）とマノ（こね棒）の産地である。その支配は、材料のないペテン中央部にあって重要である。カラコルとティカルの盛衰は、密接に関係しているように思われる。

セイバルではフンコといわれる時代であるが、資料が少なく、細分されていない。アルタ・デ・サクリフィシオスでは、アインとよばれる時代で、原古典期のサリナスからの連続性が強い。初期のものは器壁がZ型の鉢が主流であり、鏝がない。原古典期の特徴である乳房型の足がついている。後期には多色土器が現われ、四角の脚のついた筒型土器も出現する。この時代はベレモスとして区別されている。ペテン中央部との関係が強くなったことがわかる。

ベカンでは、活動の停滞した時期のチャクシツク（二五〇年～四五〇年）と、異国の要素が現われ拡大した時代のサブカン（四五〇年～六〇〇年）に当たる。エツナでは、ポデーレスといわれる時期で、活動の停滞した時期であり、下位区分されない。

ベリーズのバルトン・ラミーはエルミタと呼ばれるペテンとの関係の深い時代であるが、下位区分はされていない。初期は原古典期のフローラル・パーク式の土器が混じっている。

六世紀の中葉になると、マヤは全体的に活動がにぶるといわれてきた。マヤ文明の崩壊のり

ハーサルだという意見さえある。確かに、石碑は中央部ではほとんど建てられなくなるし、建築活動も不活発となる。土器の様式も変わり、模様も幾何的なものから、写実的になってくる。しかし、衰退のみられないところもある。それゆえ、衰退は、マヤ全体ではなく、中央部で起こったとみるべきである。

古典期後期

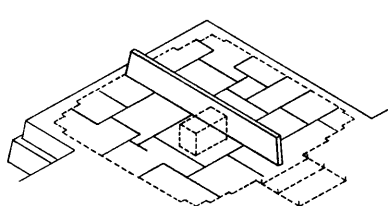
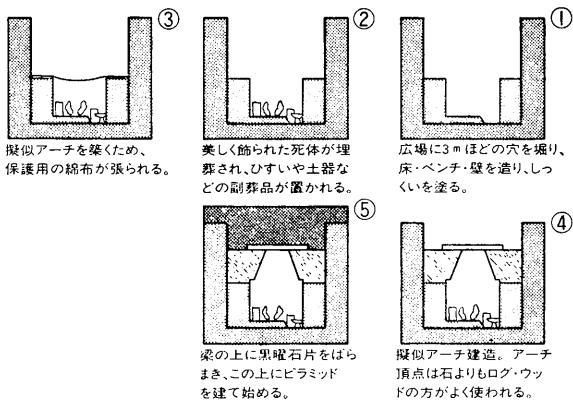
古典期後期はいよいよマヤ文明の最盛期である。まず人口が前期に比べて増える。たとえばティカルでは二倍以上になる。それにともない建築活動や土器生産が活発となる。あいかわらずピラミッドⅡ神殿は建てられるが、宮殿と名づけられている、いくつかの入り口と部屋をもった建物が増えてくる。この宮殿様式は、すでに形成期後期のエル・ミラドールにみられ、新しい建築様式ではないが、この時代に顕著になってくる。

神殿タイプの建物より宮殿タイプの建物が増えてきて、支配階級が増えていったことがうかがえるもつともよい例は、ワシヤクトウンの建物A—5である。古典期前期に、まず人工的にこしらえた基壇のうえの東、北、西の三方に、三つの神殿ピラミッドが建てられた。まだ建てられていない南面の真ん中に小さな神殿が建てられ、やがてその両脇にも増やされ、三つになった。後期にはいと、建築プランや技術に変化が起こりはじめる。まず南面の階段を一部壊して、大きな建物が付け加えられた。それから神殿のうちの一つが、宮殿タイプの建物に建て

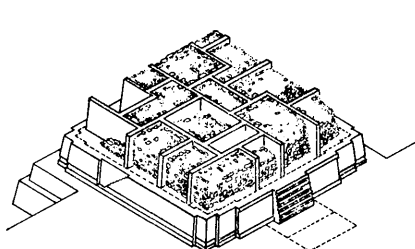
かえられた。そしてA—5の建築複合体の活動が終わる古典期後期までには、宮殿タイプの建物が基壇を覆ってしまった。最後まで残された神殿はたった一つとなり、宮殿様式の建物に囲まれ、わずかに屋根飾りがみえるにすぎなくなつた。明らかに、この建物群の機能は、後期になると変化している。社会の複雑化を反映しているように思われる。

マヤ人は建物を建てるときは、以前に建てた建物を利用する場合が多かつた。一度きりという建物は少ない。そのため建物の下には前の建物があるのが普通である。材料調達には賢明な方法といえるが、発掘する場合は、上の建物を破壊しないと、下の建物に行きつかない。そのためなかなか建て方がわからなかつたが、ティカルの北アクロポリスの真ん中にそびえる大ピラミッドを一つ犠牲にすることで、ピラミッドの建て方についての知識を得ることができた。おかげで、現在みられる中央広場の印象は著しく変わることになつたが。

ピラミッドは、多くの場合、墓のうえに建てられており、死者を弔う機能があつたとみてよい。ピラミッドができる過程をおうと、次のようになる。まず三メートルあまりの深さの穴が掘られた。墓の床や壁、時にはベンチをこしらへたあと、美しく飾られた死者が埋葬され、副葬品として、土器や翡翠、食べ物などが入れられた。大切な埋葬物を保護するため、墓の上部を綿の布で覆い、それから擬似アーチの天井が造られた。その上を埋めて、しつこいで覆つたあと、線をひき、仕切り壁をこしらえて、石やがれきをつめていく。そのあと、側壁を塗る。一層ができあがると、同じようにして第二層、第三層を少しずつ小さくしながらこしらえてい



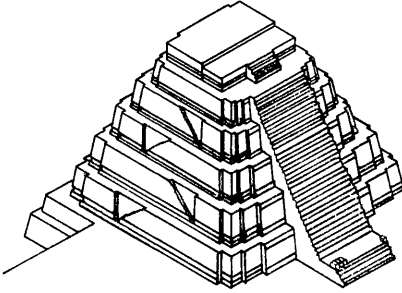
⑥ 墓完成後、仕切り壁用の線を引き、壁を造る。中心部は墓があることを示している。



⑦ 壁を造ると同時に小石と土をつめて第1層を造る。

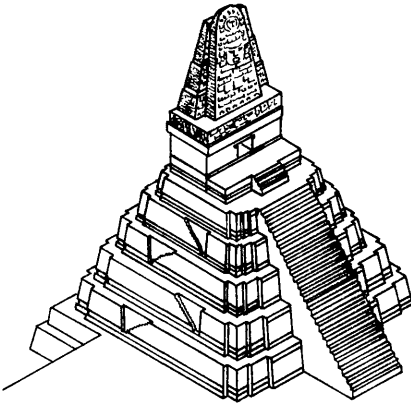
図9 ピラミッドの製作工程図

⑧



同様の方法で層を積み上げていき、最後に工事用の階段の上に階段を造る。

⑨



最上層に木製または石造の神殿を建造する。

(Hellmuth 1978より、一部変更)

く。こうしてできあがった最上段には、石の神殿か、または木としゆるぶきの神殿を建てた。普通は百人くらいの集団で、約一カ月でできるが、大ピラミッドだと二年ほどを要したと計算されている。大ピラミッドは、エル・ミラドールの遺跡でみたように、すでに形成期後期に存在している。そうした建造物を建てるには、相当な人手とともに、それを支配できる人がいたということである。

古典期後期は、マヤ地域全体にマヤの特徴が広がる時期であるが、やがて、それまで活動のなかつた小さな町が繁栄しはじめ、競いあいの激しい時代となる。たとえば、石碑に刻まれている月に関する情報についてみると、六カ月が一単位となつた太陰暦の第何カ月目かという情報が統一される。六八二年までは、各都市で異なつていた表記法が、同じになるのである。しかし七五六年以降、この統一暦は放棄され、各都市は独自の暦をもつようになっていく。独立して、競いあうようになるのである。

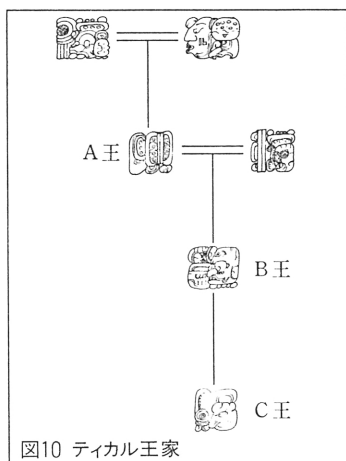
石碑に刻まれる人物は、それまでの静的な硬い構図から、動きがでてくる。テーマも変わつてきて、捕虜を捕らえたり、足蹴にしている図がふえ、女性が登場し始める。新しい町の勃興とともに、争いが激しくなつてくるのが石碑に刻まれている図からわかる。

土器も様式の変化をみせ始め、変化の速度も早くなる。あたかも需要者の要求がふえ始めるとともに、品を替え、形を替え、その要求を満たしていったかのようなのである。購買力がふえ、通商関係も充実していったことはまちがいない。

後期は、特に石碑の解読から、王朝の歴史の一こまとして捉えることができる。碑文は王朝の歴史を知るうえでこのうえない情報を伝えているが、同時に、それにより、都市間の関係や、社会構造も解明できる。代表的な遺跡の碑文からわかった王朝の歴史と、都市の関係について触れてみよう。

マヤの中心となる中央部は、何といってもティカルを挙げなくてはならない。これと関係のあった都市は、低地南部の全域に広がるといってもよいのであるが、中でも、ドス・ピラスを中心とするパシオン川流域の諸都市とナランホは重要である。ウスマシント川流域では、ヤシユチランとピエドラス・ネグラスがもっともたくさんの碑文をもつ。それに壁画で有名なボンパックを加えなければならない。南東部では、コバンとキリグアが挙げられる。地域としての重要度では若干劣るが、パレンケは豊富な碑文情報を残しており、王朝史ばかりか神々の体系を考えるうえで、触れないわけにはいかない。

ティカルでは、古典期前期の大王「嵐の空」王の死から、次第に活動が鈍り、碑文のうえで、九・六・一三・一七・〇（五六七年、石碑一七号）以後空白期となる。それがA王の即位をもって、突然のごとく、ふたたび活動し始めるのである。A王は、九・一二・九・一七・一六（六八二年）に即位する。そしてA王とその息子のB王の時代に、ティカルはもっとも繁栄するのである。この盛衰の過程についてはまだよくわからないが、すでに述べたように、テオテイワカンの影響の弱まりやカラコルの圧力と関係が深いように思われる。カラコルの脅威のた



めに、支配者層は、ティカルを離れ、ドス・ピラスのほうへ一時逃れた可能性がある。
 古典期後期の石碑の大部分は、双子のピラミッド建築群（複合体L、M、N、O、P、Q、R）のなかにある。これは、人工的な基壇の北に石碑と祭壇を壁で囲み、南には九つの入り口をもつ建物を建て、東西には、四つの階段をもつピラミッドを配置した複合体をいう。九・一二・〇・〇・〇（六七二年）から二二〇年ごと、すなわちカトゥンの終了を記念して建てられるようになり、九・一八・〇・〇・〇（七九〇年）まで続く。最初のもの（複合体L）は、神殿四号の建造に使われ、石碑、祭壇とも無彫である。おそらくA王の前の王であろう。

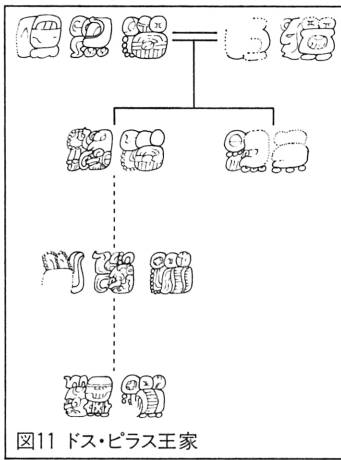
複合体M（石碑三〇と祭壇一四、六九二年）もそうかもしれない。しかし祭壇一四は、真ん中に八アハウの大きな文字があり、周囲を文字で囲んだものである。その形はカラコルに四九五年から八四九年までみられる伝統的な形式であり、ティカルではほかにみられない。それゆえA王の前の王のものかもしれない。A王の前の王とみられる墓二三号、二四号、七七号等は、南東部の特徴をもっているといわれており、さきに

述べたカラコルの支配という推測とうまく合ってくる。

複合体Mは、祭壇一四の大きな八アハウの文字からわかるように、八アハウ・カトゥンの終了を記念して建てられたものである。八アハウ・カトゥンは、第一章で述べたように、滅亡、放棄の時であるが、見方を変えれば、新しい時の始まりといえる。まさに八アハウ・カトゥンとともに、ティカルは再生するのである。

A王はティカルの中心地に聳える神殿一号、神殿二号を建て、神殿一号に埋葬された。A王の死の日はわからないが、死んでからそれほどたっていないに違いない七三四年に、B王が即位した。彼はA王の子である。それは石碑五に記されている。おそらく間にひとり支配者がいたのち、C王が七六八年に即位する。その後また歴史は不明になり、八六九年を刻む石碑一で、二九二年以来刻まれ続けたティカルの歴史は終わる。

パシオン川流域では、形成期後期から古典期前期は、アルタル・デ・サクリフィシオスが中心地であった。アルタル・デ・サクリフィシオス最初の石碑は九・一・〇・〇・〇（四五五年）で、この地域最初の石碑である。五〇〇年から六〇〇年にかけての停滞期のあと、九・九・〇・〇・〇（六二三年）に再び石碑が刻まれ始める。古典期前期までパシオン川流域の人口は非常に少なかったが、古典期後期になって、多くの地域で小さな住居址が増え始める。アルタル・デ・サクリフィシオスの主導権は続いたが、ドス・ピラスやアグアテカなどの小センターが興隆し始めた。この時代の競いあいは、一つには、盛り土農業の導入による人口増大の結果



という意見がある。ペテンの湿地帯のかなりの部分は、盛り土農業や灌漑によって集約化されていたという意見が、航空写真などの調査をもとに提出されている。そのパシオン川流域での集約農業は六五〇年〜八五〇年頃とされる。

ドス・ピラスの歴史は六四五年に始まる。ペテシユバトゥン湖の城砦都市アグアテカも文字碑文をもち始める。ドス・ピラスやアグアテカなどペテシユバトゥン湖地域の遺跡は、ティカルと非常によく似た紋章文字をもっている。紋章文字というのは、一九五八年にハイニンリッヒ・ベルリンが発見した文字で、都市固有の文字であり、意味はまだ確定されていないが、おおよそ、都市の名とみてよい文字である。それがほぼ同じであるところから、ティカルと関係

があることは否定できない。

九・一七・〇・〇・〇（七七年）以後、アルタル・デ・サクリフィシオスは石碑建立をやるばかりか、建築活動も停止する。それはドス・ピラスやアグアテカの軍事活動と関係するのではないだろうか。石碑建立の停止は、アルタル・デ・サクリフィシオスの王族が独立を失ったことを表わしているようである。

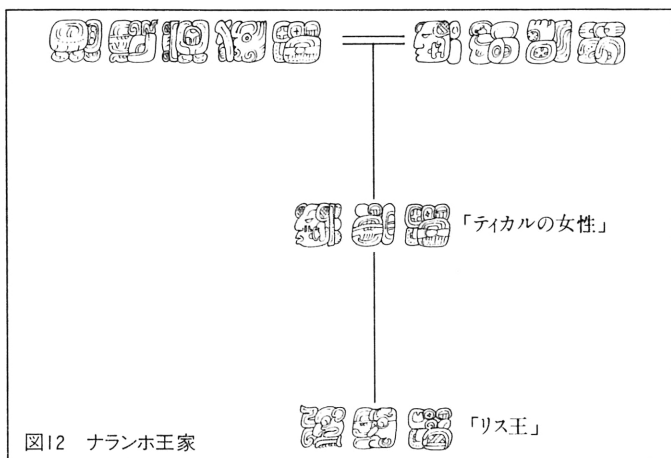
九・一七・〇・〇・〇以後約二〇年間は、ア

グアテカが主導権を握る。この時期多くの場所で石碑建立がはじまる。イツアンが大センターとなる。

九・一八・〇・〇・〇（七九〇年）以後はセイバルがこの地方の中心地の座を占める。九・一九・〇・〇・〇（八一〇年）をすぎると、他の場所は石碑をもたなくなる。ラ・アメリカが最後の石碑を建てる。

セイバルの繁栄は、リオベック、チエネスまたはプウク地方からの異民族の侵入によると推定されている。セイバルの石碑群は二期に分けられる。九・一六・〇・〇・〇（七五二年）から一〇・三・〇・〇・〇（八八九年）までのA期は、土器は北ユカタンのものと似ている。そしてプウク式の日付がウスマシントン流域で刻まれる。セイバルの建築もプウク的である。ベカン、バルトゥン・ラミー、コルハでも外部からの侵入があったとされている。B期は一〇・三・〇・〇・〇（一〇・五・〇・〇）（八八九年〜九二八年）である。一部A期と交わるといふ意見と、A期のあとにB期がくるという意見にわかれている。前者は外部からの侵入があり、彼らが定着して主権を発揮したという解釈である。後者は、タバスコ地方からの異民族の侵入があったとみる意見である。この時期、非マヤ的な凶像や文字が石碑に刻まれる。それはペテン中央部まで広がり、ヒンバルやウカナルなどで認められる。

ナランホは、休止期があるところから、三期に分けることができる。第一王朝は、五二五年から六四二年までである。最初の王のあと、カラコルの王が登場し、カラコルに支配された時



代が続いた。第二王朝は、六八二年から七三一年まで、第三王朝は、七五五年から八二〇年まで続く。

ナランホの第二王朝は、ドス・ピラスやテイカルに關係する。第二王朝は、「テイカルの女性」がナランホに九・一二・一〇・五・一二（六八二年）にやって来たときから始まる。「テイカルの女性」は、女性を表わす文字にテイカルの紋章文字をもつところから名づけられたあだ名である。しかしさきに指摘したように、テイカルの紋章文字とドス・ピラスの紋章文字は区別がつかない。さらに「テイカルの女性」の父親とみられる文字は、ドス・ピラスの初代の王と同じ文字であり、その子供の可能性が高い。そうすると、「テイカルの女性」は実はドス・ピラスの女性かもしれないのである。ところが、テイカルの神殿一のリンテル一に記された九・

一三・三・〇・〇（六九五）の日付とその日の出来事を記す文字が、ナランホでも記されており、さらに、一カトゥン後にまたその記念が記されているところから、ティカルとも関係が深いことは確かなのである。さらに、ティカルのA王の父親は「楯頭蓋骨」とでもあだ名できる文字の人であるが、それとドス・ピラスの第二代の王の文字が非常によく似ていることも、ドス・ピラス、ティカル、ナランホの関係が深いことを示している。ただし、第二代の王は、初代王とイツァンの女性の子であるが、誕生が六七二年であり、A王の即位は六八二年であるところから、年代的に合わない。しかしドス・ピラスの階段碑文には、もうひとり楯の文字素をもった人物がいる可能性がある。その人物が第二代の王より前に生まれた人であったとすると、A王の父となりえ、歴史的に矛盾のない流れとなる。ただ残念なことに、階段碑文の風化が激しく、現状では、それを確かめることはできない。

ウスマシントン川流域には、ピエドラス・ネグラスやヤシュチランがある。ピエドラス・ネグラスは、石碑に王朝の歴史が刻まれていることが証明されたテキストを提供した遺跡として有名である。王朝には、九・八・一五・〇・〇（六〇八年）から九・一八・五・〇・〇（七九五年）にかけて、七代の王がいたことがテキストから読み取られた。それぞれの王の誕生と即位の日は、次のようになる。

初代 即位 九・八・一〇・六・一六 一〇キップ 九マック（六〇三年）

| | | | | |
|----|----|--------------|--------|---------------|
| 二代 | 誕生 | 九・九・一三・四・一 | 六イミシュ | 一九ソツツ (六二六年) |
| | 即位 | 九・一〇・六・五・九 | 八ムルツク | 二シツプ (六三九年) |
| 三代 | 誕生 | 九・一一・一二・七・二 | 二イツク | 一〇パシユ (六六四年) |
| | 即位 | 九・一二・一四・二三・一 | 七イミシュ | 一九パシユ (六八七年) |
| 四代 | 誕生 | 九・一三・九・一四・一五 | 七メン | 一八カンキン (七〇一年) |
| | 即位 | 九・一四・一八・三・一三 | 七ベン | 一六カンキン (七二九年) |
| 五代 | 即位 | 九・一六・六・一七・一 | 七イミシュ | 一九ウオ (七五八年) |
| 六代 | 即位 | 九・一六・一二・一〇・八 | 六ラマツト | 一マツク (七六三年) |
| 七代 | 誕生 | 九・一五・一八・一六・七 | 一二マニツク | 五ソツツ (七五〇年) |
| | 即位 | 九・一七・一〇・九・四 | 一カン | 七ヤシユキン (七八一年) |

ウスマシンタ川の上流にあるヤシユチランやボナンパックとの関係が碑文からうかがえるのは、第二代の王からである。リントル二号は、九・一一・六・二・一 (六五八年) から九・一・一五・〇・〇 (六六七年) で終わるが、ヘルメットをかぶり、やりをもった戦士が登場する。その図と碑文をみると、まだ十分には理解できないが、ピエドラス・ネグラスの王が、ヤシユチランやボナンパックの戦士を閲兵しているようである。リントル三号は、九・一五・一八・三・一三 (七四九年) から九・一七・一一・六・一 (七八二年) までの出来事を扱っている。

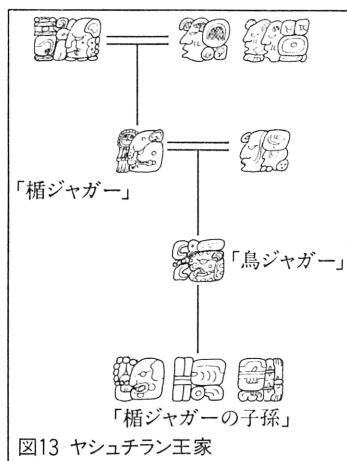
最初の日付は第四代の王の即位一カトゥン記念日である。その日にヤシュチランからの使節団がやって来たらしいことが記されている。碑文に囲まれた真ん中には、王が台座に座り、儀式に参加した人であるうか、台座の前に座っている人々を見下ろしている。碑文にはティカルのA王の名前もみられ、ティカルとも関係があったことがうかがわれる。

ヤシュチランはビエドラス・ネグラスの第三代王頃から繁栄し始める。その繁栄を導いたのは、「楯ジャガー」と呼ばれる王と、その息子の「鳥ジャガー」である。

「楯ジャガー」は九・一〇・一五・〇・〇（六四七年）頃に生まれ、九・一五・一〇・一七・一四（七四二年）に死亡したと推定されているが、その推定が正しいとすると、実に九十歳以上の長寿を全うしたことになる。しかし「楯ジャガー」が碑文にはっきりした形で登場するのは、九・一二・八・一四・一（六八一年）になってからであり、それから死亡した日までの約六一年である。その間にアハウという捕虜をはじめ多くの捕虜を捕らえた記録とともに、母親の死（七〇五年）や妻の死（七五一年）が記されているのが認められる。

「楯ジャガー」が死んで約十年後、子の「鳥ジャガー」が即位する。「鳥ジャガー」は九・一三・一七・一二・一〇（七〇九年）に誕生し、九・一六・一・〇・〇（七五二年）に即位した。

最後の登場はリントル九である、その日九・一六・一七・六・一二（七六八年）が死亡した日に近いものと考えると、六十歳弱である。「鳥ジャガー」の名にはほとんどの場合カワツクを捕らえた人という文字がつく。カワツクは「楯ジャガー」のアハウに匹敵する人物であったと



思われる。

「鳥ジャガー」には、少なくとも三人の女性がいた。イックとイシユの文字をもつ女性と、もう一人は「頭蓋骨―零」というあだ名のついた女性である。イシユの文字をもつ女性には、テイカルの紋章文字が生起しており、テイカルから嫁いできた可能性がある。

「鳥ジャガー」を継いだのは、「梶ジャガーの子孫」とあだ名されている人物である。彼は九・一六・〇・一四・五（七五二年）に生まれ、九・一八・九・一〇・一〇（八〇〇年）まで登場する。ヤシュチラン最後の日付は、九・一八・一七・一三・一四（八〇八年）である。

まさにその時期、ポナンパックは絶頂期をむかえる。時の王はカン・モオ（空ムアン鳥）王である。ポナンパックでは、石碑二、リンテル二、建物一の部屋二の壁画に、ヤシュチランの紋章文字が認められる。有名な壁画には「梶ジャガーの子孫」が登場するし、ヤシュチランの紋章文字をつけた女性も、壁画ばかりでなく石碑二にも描かれており、ヤシュチランと密接な関係にあったことがわかる。

マヤ地域の南東部には、キリグア、コパンという美しい碑文を残した遺跡がある。キリグア

では、一九七八年に二六号記念碑が発見され、続く翌年の発掘により、それまで不明であったキリグアの起源と初期の発展に対する知識は増大した。記念碑二六号に描かれている像は、正面を向き、水平に儀式棒をもっている。ペテンの浅浮き彫り技法に則っているが、横面も正面と一緒に使った全正面像の最初のもので、それはのちにキリグアでの特徴となる。新しい三次元的な地方スタイルが確立したといえよう。裏面には文字が刻まれているが、最初の日付は九・二・一八・〇・〇（四九三年）である。興味深いのは三ヘル文字である。その次には四ヘル文字があり、第三代と第四代の王を記しているように思われる。のちに記念碑三号（石碑C）の最初の日付は、九・一・〇・〇・〇（四五五年）のことに触れているので、おそらくこれがキリグアの王朝のはじめを記しているであろう。

ところがこれ以後約二〇〇年間キリグアの歴史は不明となる。そして記念碑一三号（祭壇M）九・一五・〇・〇・〇（七三二年）、記念碑一九号（石碑S）九・一五・一五・〇・〇（七四六年）以後再興する。それ以前に、記念碑二〇号（石碑T）、記念碑一二号（祭壇L）がある。五〇年〜七二〇年の石碑の空白期間に古典期後期の建築物の建設が開始された。アクロポリスの最も古い建物（第四段階）がこの時期にあたる（たった一つの放射性炭素年代測定法による年代は五九〇±五〇年）。

キリグアが栄えるのは、「カワック空（二本足の空）」王の時代である。キリグアもピエドラス・ネグラスと同様、記念碑は五年ごとに建てられているが、カワック王に関しては、二つの

日付が繰り返し記されている。九・一四・一三・四・一七 一二カーバン 五カヤップ(七二五年)と九・一五・六・一四・六 六キミ 四セック(七三八年)である。二つの日付の本当の意味はまだわからないが、最初の日は王が権力を確立した日、二つ目の日はコパンの「一八の兎(または一八ジョグ)」とあだ名がつけられている王を捕らえた日とみられる。

キリグアでは、七四〇年から八一〇年の約七〇年間に、古典期後期のマヤ都市として認められる大建築、石碑群の建造が行なわれた。アクロポリスは拡大され、以前の建物は、ひとつ(1B—2)を除き新しい建物で覆われた。大広場は北にのび、一〇〇×八五メートルの大広場は丸石で埋めつくされ、「カワツク空」王の記念碑が建てられた。これらの急速な成長は、おそらく、コパンの王「一八の兎」を捕らえたのちに起こったものであろう。

カトゥン一六、一七の「カワツク空」王の時代、キリグアはコパンから独立し、独自の発達をとげた。記念碑の大きさといい、広場の大きさといい、コパンをこえている。モタグア川中流域に産する翡翠やチャヤル産の黒曜石の交易路を支配下に置いたからではなからうか。

キリグアの最終段階は、九・一八・〇・〇・〇(七九〇年)以後に始まる。この最後の時期は、コパンの影響が強くみられる。建物1B—1は九・一九・〇・〇・〇(八一〇年)の日付をもつ。その碑文には、キリグア最後の王「翡翠空」王とともに、コパンの最後の王「ヤシュパック」も登場する。少しあとの建物1B—5も「翡翠空」王のものである。

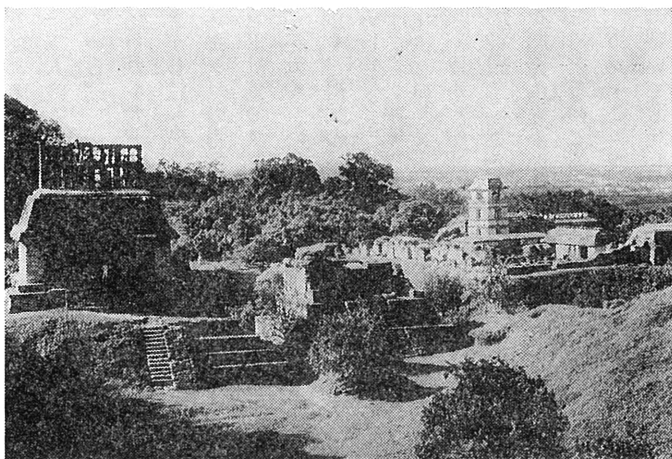
キリグアの王朝の終末やその後の歴史はよくわからないが、少なくとも後古典期後期まで人

は住み続けた。たぶん外来者の支配下に入ったのであろう。外来の土器が球戯場の広場からかなり見つかった。これらの土器はユカタンの東海岸のものとのつながりが濃い。チチェン・イツアにみられるチャクモール像も発見されている。ベラクルス様式の彫刻メタテも見つかつており、沿岸長距離交易がおこなわれていたのであろう。しかし後古典期の終わりには放棄された。おそらくコルテスが寄ったニトがキリグアのかわりに台頭したと思われる。

キリグアはペテンとのつながりがあったのに対し、コバンはその彫刻様式からみて、サルバドールやグアテマラ高地とのつながりがあったようである。コバンの発掘は十九世紀の末には始まっているが、最近発掘が精力的に行なわれており、かなり歴史がはっきりしてきた。

中心地はコバン川の北岸のコバン溪谷にある。一平方キロ弱の小さな遺跡にすぎないが、大アクロボリスの複雑な建築集合や飾りの石彫り、石碑、二〇〇〇を越す文字が刻まれているといわれる階段など、非常に印象的な遺跡である。もともと栄えたのは古典期後期の六〇〇年、八〇〇年である。しかしもともと古い石碑は現在のコバンの町と中心遺跡の中間で発見されている(四六五年)。中心地ばかりか周辺でも、黒曜石や翡翠がたくさん見つかっており、地理的に考えても、コバンは高地マヤと低地をつなぐ交易の要であったと考えられる。

コバンがもつとも繁栄した時代の王としては、「煙のイミシュ」、「一八の兎(またはジョグ)」、「煙の猿」、「煙の貝」、「ヤシュバック(夜明)」王が同定されている。「煙のイミシュ」王は、六二八年に即位し、六九五年に死亡したと考えられている。そのあとを継いだ「一八の兎」王



写6 パレンケの遺跡(左が「太陽の神殿」、右奥は宮殿)

は、中心部の大広場にあるA号やB号などの石碑を建てたが、キリグアの「カワツク空」王に七三八年に捕らえられ、首をはねられて殺されたらしい。「煙の猿」王の短い支配のちに即位した「煙の貝」王は、マヤで最長の碑文を刻む階段やそのうえの神殿を建造して、王権を誇示するのに努めたようである。しかし考古学的には、その建物は、コパン中心部でもっとも脆弱な建て方で、経済的には弱い社会になっていたと推定されている。コパン最後の王となる「ヤシュバツク」王は、数々の碑文に九・一六・一二・五・一七(七六三年)に即位したことを記している。もっとも高いピラミッド(建物一六)を建て、石碑Nや祭壇Qなどに自らを記し、八二〇年頃死亡した。以後コパンは急速に衰退する。

パレンケでは「パカル王」の代になって繁栄

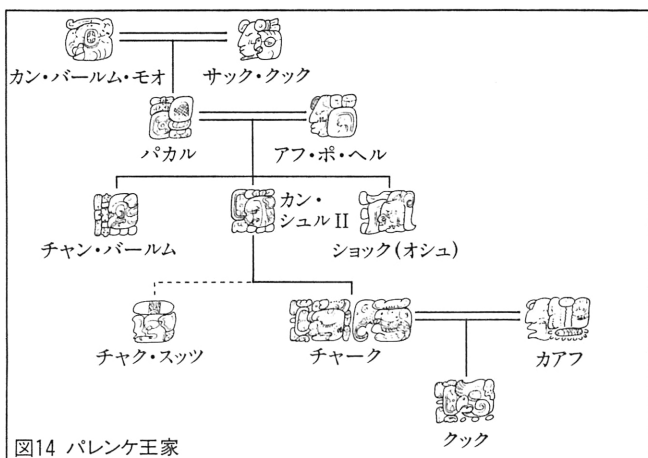
を始める。パカル以前の王は実際に存在したか不明であるが、「クック」(四三二年即位)から二人の人物の履歴を知ることができる。さらにその前の神話時代の神々がテキストに記されている。

「パカル大王」は六〇三年に誕生し、即位は六一五年、死亡は六八三年と解説されている。なきがらは『碑文の神殿』の地下の豪華な石室に手厚く埋葬されていた。その墓は、一九五二年メキシコの考古学者アルベルト・ルスの手により、三年がかりで発掘された。マヤではピラミッドは墓ではないとされてきた定説を覆す大発見であった。

「パカル」の父は「カン・バールム・モオ」であり、母は「サック・クック」であった。おそらく、祖父のパカルの名を受け継いだとみられる。「アフ・ポー・ヘル」と結婚し、「チャン・バールム」と「カン・シュル二世」と「オシュ」をもうけた。

「パカル」と「アフ・ポー・ヘル」の子である「チャン・バールム」は、六三五年に生まれ、「パカル」が死んで、六・一二(二三二日)後の六八四年に即位し、七〇二年に死んだ。『十字の神殿』、『葉の十字の神殿』、『太陽の神殿』と呼ばれる十字グループのピラミッドを建て、マヤ暦元にさかのぼる時代の神々を記したばかりか、「パカル」以前の祖先の系譜を残した。ちやうどそのころ、ティカルでは長い間の沈滞を破り、A王が即位している(六八二年)。

「カン・シュル二世」は、六四四年に誕生し、七〇二年に即位したあと、七一年にトニナの戦いで敗北して、捕虜になったらしく、トニナの石彫に、彼の捕らえられた姿と名が刻まれ



ている（記念碑一二二号）。

若干疑問の人物「オシュ」または「シヨック」と呼ばれる王（誕生六五〇年、即位七二〇年）のあと、「チャーク」とあだ名されている人物が七二二年に即位する。彼は「カン・シュル二世」の子で、六七八年に生まれた。彼を継いだのは、六七一年生まれの「チャク・スツ」という王で、即位は、七二三年である。彼のほうが「チャーク」より年上であるので、おそらく「カン・シュル」の子ではなく、親類筋に当たる人物と想像される。彼は九・一五・〇・〇・〇（七三一年）という区切りのいい日を残したが、そのあと、九・一六・一三・〇・七（七六四年）までパレンケの歴史は空白となる。

次に登場するのがクック王である。彼は七六四年に即位し、一カタウン（二〇年）記念の日を『九六文字碑文』というパレンケでもっとも

美しい石板に残している。これをもって、石彫りは途絶える。しかし、土器に七九九年の日を記したものがあり、そこまではパレンケの王朝が続く。以後パレンケは急速に衰退する。

古典期後期は、一言でいえば、より世俗的になり、より開発がすすみ、より階級差が生じた時代といっているだろう。人口が増大し、経済活動が増え、また建築活動も盛んになったのであり、いいかえれば、より大きく、より豊かに、より激しくなった時代といえよう。あまりに肥大してしまい、当時の許容量を超えてしまったためではなからうか。八〇〇年をすぎると、マヤ文明は崩壊にむけ、一目散にその坂をかけおり始める。

その始まりは、パレンケあたりである。そこから北東にむかって、徐々にマヤ文明は崩壊していく。石碑の最終日付をたどることで、見事にその道筋を描くことができる。

そこで、マヤ文明の崩壊ということになるわけであるが、実はそれは低地南部のことではない。低地北部は滅びることなく、その後も栄える。

低地南部のマヤ文明の崩壊の原因は、これまでいろいろ考えられてきたが、大きく分けると、内部原因説と外部原因説にまとめることができる。内部原因は、さらに自然的なもの、社会的なものに分けることができる。

内部原因

自然的原因

生態系の変化

気候の変化、旱魃、

土地の侵食、疲弊、

森林伐採によるサバンナ化

天災（地震、ハリケーン）、昆虫の害

病気

社会政治経済的原因

農民の反乱

人口肥大

都市間の争い

外部原因

経済機構の崩壊

異民族の侵略

考えればさらにいろいろ原因を思いつくかもしれないが、崩壊の原因については、第十章でもう少し詳しく扱うことにしよう。